市民における 読書の生態

市立図書館では館外貸出しをはじめてから満二年になり現在では一日平均六十人から七十人に及んでいるが、今までにどんな図書が多く読まれたか、これはその貸出図書から見た市民の「読書の生態」である。

公務員は"ぼん譯もの"

市民はユーモア小説がお好き

豫約なしに讀めぬ大東亞戰史

過去二年を通じて最も目立つ現象はこの程度のユーモアで五位を占めて醒まれていた傾向である。

「二十五時」

第二に風と共に去りぬ」は二八年も相変らず愛読され古典になりかけている。

「二十五時」

は第三位に選ばれたものであるが、二十五時とは、「戦争が終ってから、ちょうど二十五時間目にあたる」という意味で、ルーマニアの作家ゲオルギウ作、一般に不評の作品であるが、特に公務員の間で人気があったのである。

「二十五時」

は、ルーマニアの一農民が、ナチスの強制収容所、ルーマニアの強制労働収容所、ルーマニアの共産主義の強制収容所、ルーマニアの強制収容所、ルーマニアの強制収容所、ルーマニアの